

特集「最近のメディア」

山 羽 和 夫

今年の大河ドラマ新撰組の土方歳三は函館・五稜郭で最期を迎える。五稜郭の戦いで徳川幕府の流れが完全に消滅するが、このときのトップ榎本武揚（1836～1908）が許され、その後、樺太千島交換条約や北海道開発に活躍した話はこれまでマスメディアでも数多く紹介されてきた。

しかしながら、榎本武揚が、文明開化の間もない当時の科学技術の先端を担う電気学会（1888年設立）の会長を20年以上の長きに亘って務めた、という話は理工系、特に電気屋と自負する人たちにも意外と知られていない。電気学会はその後、電力・電気モータ（電気材料）の分野、通信・コンピュータの分野、テレビジョンの分野、明かりの分野、情報の分野と分かれていくのであるが、そもそものわが国の「メディア」の学術的な起源が電気学会初代会長であった榎本武揚の功績にあるといってもよい。

2003年12月に、デジタルの地上放送が東京、名古屋、大阪で開始され、いわば新しい形の情報伝達が行われようとしている。デジタル放送といっても、間違えてはならないのは、決して「色」がよくなったわけではない。ただ、高精細になってヒトの顔のしわが見え、ボケ画像が鮮明になったことや他の大量の情報の双方向のやりとりなど、これまでになかった新しい形式のメディアのスタイルが猛烈な勢いで誕生しつつある。

メディアとは、広義では情報とコミュニケーションを併せたものと解釈されるが、日本福祉大学でも、二校地（美浜キャンパスと半田キャンパス）間の遠隔講義、インターネットで試験を行うなどわが国で初めての本格的なインターネットを使用した福祉経営学部通信教育、海外にちらばっている学生がインターネットを通じて研究や講義を受講できる国際社会開発研究科（通信制大学院）、平成16年4月に新たにスタートする情報社会科学部での情報を基盤とする二学科（人間福祉情報学科と生活環境情報学科）など、まさに全学をあげ新しいメディア教育に取り組んできている。

教育の現場においては21世紀での私たちの未来の生活や社会に繋がるメディア教育のあり方を人間、社会の側から考え、デザインしていくことが最も重要なもののなかの一つであると考え、「最近のメディア」という特集で募集をかけたところ全学部から

9編ほどの原稿が寄せられた。

本特集では、9編の原稿を慎重に審査し、今、話題の e-learning を題材にした2編 (教育の質を変えるニューメディア, e-learning システムの開発)、障害者のための Linux 環境改善を題材にした1編 (Welfare Linux On Demand の試作)、4月からスタートする情報社会科学部二学科からの二つの現状報告、(生活環境とメディア, インターネット・ウェルフェア・ミュージアムを作る)、インターネットリテラシーからの1篇 (インターネットリテラシーとデジタル・デバイド)、メディアでは世界で最も注目を浴びている中国の変容を述べた2編 (90年代以降の北京の新聞事情, 中国のメディアの変容についての一考察)、最後に、今後のメディアとして1篇 (情報弱者とこれからのメディアに対する期待) の順に採用、掲載した。

本特集での論文・現状報告はいずれも日本福祉大学の明日を担う先生方の新しいメディアへの主張や期待が述べられている。ニューメディアとしての荒っぽさもあるが魅力もまた兼ね備えたものとして、あるいは、函館五稜郭以後の若き榎本武揚の夢や希望を想いつつ、本特集をご覧いただくと幸いである。